スポーツ報道のレトリック
——スポーツはいかにして報道されているか——

多々良　直　弘

Abstract

Rhetorical Styles of Sports News Stories in English and Japanese

Naohiro Tatara

Every language has its own fashions of speaking integrated by habitus, which is considered to create the homology across cultural products. The purpose of this article is to analyze the rhetorical styles of news stories reporting sports events in English and Japanese, and to present the view that the rhetorical styles of sports news stories are culturally motivated. Moreover, the rhetorical effects of metaphorical expressions and other idiomatic expressions in media discourse are analyzed in this paper.

1. 序論

言語には事実を構築する力がある。現実世界でおこる出来事をどのような言語表現で描写するのか、また出来事のどの部分に焦点を当て表現するのかによって、我々の前には異なる事実が構築されると言っても過言ではない。新聞報道やその他のメディアでは同一の客観的な事実が報道されていると考えられがちだが、井上 (1995) でも指摘されている通り、そこには出来事のどの側面を社会文化的な価値観に則って取捨選択するかにより、異なる事実が構築されるのである。つまり、出来事のどの部分を言語化するのかという

行為それ自体が文化的な行為であると言うことができるだろう。また何を報道するかということに加え、報道において当該の事態をどのような言語的資源により表現するのか、どのような表現が好まれるのかということにも各文化により違いがある。

本稿は新聞における日本語と英語のスポーツ報道の言語的特徴を分析し、スポーツ報道における言語表現の特徴を明らかにしていくことを目的とする。その際に日本語と英語の共通点と相違点を記述することに加え、各言語の特徴的な表現方法とこれまでに指摘されてきた日本語と英語の言語的な特徴や文化的な特徴との相同性を求めていきたい。

2. スポーツ報道のレジスター

レジスターとはある個別言語の変種のうち、話し手の社会的属性により区分される方言や集団語などの言語使用、つまり言語表現が使用される社会的状況的枠組みにおいて、話し手が状況に応じて用いる言語変種のことである。Ferguson (1983) が述べているように、実際に言語が使用される状況による言語表現（構造）の違いは、あらゆる言語に見られるものであり、Haviland (1979: 389) は全ての発話は何かしらの状況に根ざしたものであるという考えのもと、「話すということはその時のコンテクストを指標するレジスターを選択するということである」とも述べている。

Ferguson (1983) は英語と日本語のスポーツ実況のレジスター (SAT: Sports announcer talk) の統語的特徴を中心に分析し、SAT にはコピュラなどが省略される単純化 (simplification)、主語と述部が入れ替わる倒置 (inversions)、結果表現 (result expressions)、 同格名詞句や非限定関係代名詞などの修飾句の多用 (heavy modifiers)、現在形や進行形が多用される時制表現 (tense usage)、野球のカウントなどをレポートする際の慣例表現 (routines) などの特徴があると指摘している。この Ferguson が分析した SAT のように、状況に密接に関係している特徴的な表現方法の集合をレジスターと呼ぶことができるが、これは Hopper (1998) の提唱する Emergent Grammar にも関連しているものである。Emergent Grammar とは、文法を静的な構築物として捉えるのでは

なく、言語が実際に使用される談話において繰り返し使用されることにより構成され、常に変化する可能性を秘めた動的な構造を持つものとして考えられている。またこの文法観の下では、人間の言語知識としての文法はさまざまな言語使用の状況と密接に関連したサブシステム、いわば Ferguson のいうところのレジスターの集合体であると定義することもできる。つまり、言語使用者の背景知識や過去の経験などにより、話者が有する言語の知識はたとえ同じ言語の話者であっても異なるということになる。また言語使用者の置かれたコンテクストにより、言語知識のどの部分が活性化されるかが異なるのである。岩崎 (2006) はこの Hopper (1998) の主張する Emergent Grammar を構成するサブシステム（小文法）の一つとして新聞社説における言語使用の分析を行っている。

新聞報道などのメディアにおける言語使用に関してはこれまでにも指摘されているように、言語の機能的（文法的）要素の排除や過去に起こった出来事を記述する際の現在形の使用、語の短縮などがレジスターとしての特徴が挙げられる。スポーツ報道に関する研究では井上 (1995) があるが、井上は日米の野球報道の違いに着目し、「「言語としての文化」という視点からの文化記号論の枠組み (129)」において、日本語と英語の特徴的な記述パターンがどのような意味を持っているのかについて論じている。その際事実を作り上げる行為が文化的な営みであるということを主張し、日本と米国の野球報道には野球というスポーツの試合を構成している要素のどの部分が報道される際に言及されているのかという点に違いがあることを指摘している。いわば、井上は野球という試合を報道する際に「何をことばにするか、何に言及するか (137)」という点で日本語と英語を比較していると言えるだろう。

次章では、サッカーを中心としたスポーツ報道のレトリックを出来事のどの部分に言及し、また報道のテクストがどのような言語表現（言語的資源）で構成されているかということを比喩表現、慣用表現と新奇表現、そして原因と結果の表現方法に焦点を当て分析していき、日本語と英語の新聞報道というコンテクストにおけるレトリックの共通点と相違点を論じていきたい。

3. 事例研究

本章ではスポーツに関する新聞報道における特徴的な言語表現を分析し、日本語と英語の言語的特徴を分析していく。言語データは、『読売新聞』、『朝日新聞』、*Daily Yomiuri*、*Japan Times* の四紙の 2006FIFA ワールドカップドイツ大会に関係する記事からから主に収集した。特に *Daily Yomiuri* と『読売新聞』の比較は同じ出来事の同じ場面を題材にしているという条件の中、何に言及し、またどのような言語的資源により表現するのかという点に日本語と英語で違いが出れば、そこには有意義な各言語の特徴が観察されると考えられる。また本研究で求めるものは各言語における「好まれる言い廻し (fashions of speaking)」、つまり各言語における言語表現の傾向である。言語には各言語に独自の特徴が備わっていると同時に、全ての言語に共通である普遍的な側面があるため、日本語と英語は非常に異なる特徴を持つ言語ということはできるが、両者を全く異なる言語として扱うことは不可能である。従って、両言語を Whorf (1956) や池上 (1993) などによって主張されているような、「好まれる言い廻し」のレベルで比較することで各言語の特徴を捉えることが可能になるだろう。

3.1 スポーツ報道に見る比喩表現：スポーツは戦争か？

メタファーは Lakoff & Johnson (1980) の研究以来、単なる言語の装飾や文学的な表現としてではなく、人間が現実世界を認知する際に重要な概念能力に関連するものであると考えられるようになった。つまり、メタファーとは単なる言語表現の問題ではなく、人間の思考や外界の認知に大いに関連しており、人間はある出来事や概念をもうひとつの異なる概念を利用して理解しているのである。スポーツ報道では、野球では戦争のメタファーが使用されることが非常に多いという松井 (1998) の指摘にもあるように、サッカー報道においても以下のように「戦争」や「戦い」、「死」に関する比喩表現が、特に見出しで非常に多く使用されている。

(1) 弾丸ファンペルシー

(2) アンリ決勝弾
(3) ロドリゲス決着弾
(4) “空砲”日本重い条件
(5) ゆりかご重戦車
(6) “魔法の４人”不発 (『読売新聞』)

これらはすべて日本語の例だが、戦の際に用いられる武器（兵器）としてシュート（ゴール）や選手を捉えているものであり、松井の挙げている野球の「主砲」、「長距離砲」、「先制弾」などと同じ表現方法である。これらの表現を使用することで、聞き手にはサッカーを戦争というドメインを通じて理解することが求められることになる[1]。英語でも同じように「サッカーは戦争（戦い）である」という概念メタファーに基づいた表現が見出しや本文中にも多用されている。

(7) Italy *puts* Ghana *to the sword.*
(8) Argentina *buries* Serbs under 6-goal barrage.
(9) Brazil *gets guillotine.*
(10) The former France skipper pointed to lack of experience as the deciding factor for *war-torn* Cote d'Ivoire, something that will only come with time.
(11) Isaksson managed to stop Klose, but not Podolski, who *had moved in for the kill.*
(12) Larsson's miss seemed to *take the life out of* Sweden and sharpen up Germany.
(13) On Tuesday, he *rang the death knell* for Germany.
(14) But one Maradona style goal *killed* us in the end. (*Daily Yomiuri*)
(15) Australia *storms* past Japan 3–1. (*Japan Times*)

まず (7) の「刃にかける、斬り殺す」、(8) の「埋葬する」、(9)「処刑される」(10)「戦で荒廃した（戦いに敗れた）コートジボアール」、(11)「とどめを刺す」、(13)「弔いの鐘をならす、終焉を告げる」、などのように全て「サッカー

は戦争（戦い）である」や「負けることは死ぬことである」などに基づいた比喩表現が多用されている。

以上の例にみられるようにスポーツ記事には多彩なメタファー表現が使用されている。これが意味するところは、サッカーというスポーツを書き手が戦争（戦い）として捉え、表現することで、サッカーというドメインに戦争というドメインを持ち込むことで、受け手にもサッカーを戦争を通して解釈を求めているということになる。つまり比喩的な表現により、受け手側の解釈を限定しているということもできるだろう。籾山 (2006) が、「才能が開花する」や「苦労の末、ようやく芽が出た」などの例をひいて、日本語では人間を「植物」として捉えていると述べていることと同じように、日本語も英語もサッカーというスポーツを「戦争（戦い）」や「生死」という概念を通じて捉えているということができる。

また、このような比喩表現の本質は、抽象的でわかりづらいものをより具体的で身近なもので見立てることであるが、実際にサッカーというスポーツと戦争を比較してみると、一般的に現在の社会生活においてはサッカーの方が身近であると考えられる。それでは、なぜあえて身近な出来事を身近でないもので喩えるのだろうか。籾山 (2006) は打撃技術や制球力が極めて優れた野球選手を呼ぶ「安打製造機」や「精密機械」のような表現を例に挙げ、比喩表現が使用される目的の一つとして対象の特徴を誇張して表現することであると述べている。つまり、サッカーというスポーツを「戦争」や「死」の比喩表現で述べ、試合（戦い）の激しさを誇張して表現しているということができるだろう。また (15) の表現は storm という表現を使用し、天候のドメインにおける嵐の知識を参照にすることでオーストラリア代表の勢いを誇張していると考えられる。

3.2 慣用表現と新奇表現：言語の〈詩的機能〉への傾向

前節ではサッカーというスポーツがどのような比喩表現を通じて報道されているか、つまりサッカーというスポーツがどのように日本語と英語で捉えられているのかということを考察したが、本節では、スポーツ報道において

非常に多用される慣用表現、また慣用表現を基盤にした「語呂合わせ」、また文学作品や映画のタイトルや台詞を使用した表現と、これらが多用される動機付けについて考察していく。まずことわざなどの慣用表現の使用例を見てみよう。

(15) Better late than never.
(16) Patience is a virtue. (*Daily Yomiuri*)

このような慣用表現を見出しに使用することの利点は、これらの表現を見たときに、各言語使用者（この場合は読者）が当該の慣用表現に内在する意味や過去にその表現が使用されたコンテクストにおける情報（言語使用者の背景知識）を参照することにより、当該の試合内容が明確に伝達されるという点である。(15) の場合にはイングランド代表が格下のチーム相手にチャンスを量産しながらも、なかなか得点を挙げることができず、試合終了間際にようやく得点を挙げた試合を説明し、(16) も同様にドイツ代表がロスタイムにようやく得点し、勝利を手に入れた試合についての見出しである。

次に語呂あわせを利用した表現について見ていく。スポーツ報道では、慣用表現をもとにした語呂あわせ、また語呂合わせを利用した比喩表現などが使用される傾向が強い。以下の表現を見てみよう。

(17) ガーナ　チェコぺろり
(18) ベッカム FK　「急曲」の弧 (『朝日新聞』)
(19) ベッカム様サマ　手詰まり“降下抜群”FK 弾 (『読売新聞』)
(20) Brazil harpoons Wales.
(21) Czechs cash in on Yanks.
(22) Ghana cancels Czechs.
(23) Czech me out.
(24) Dutch treat.
(25) Orange juiced.
(26) Kaiserslauter-ed.
(27) What a card! (*Daily Yomiuri*)

(17) から (19) は日本語の例だが、それぞれチェコとチョコ、急曲と究極、降下と効果を利用した語呂合わせである。また (17) ではチョコレートの商品名とガーナの国名も利用され、ガーナがチェコを圧倒したことを表している。(20) は Wales と whales、(21) から (23) は Czech と check という国名と同じ発音を持つ語を利用した語呂合わせである。これらの語呂合わせをもとに、(20) では「鯨などの巨大魚に銛を打ち込む」という意味の harpoon という語を利用し、「ブラジルがウェールズを退治する（負かす）」という意味を比喩的に表現している。(21) では通常では「金銭的な利益を得る」という意味のイディオムである cash in on を利用し、「勝利し、勝ち点を得る」という意味を作り出し、(22) では「小切手を無効にする」という意味の cancel checks という表現を使い、「負かす」の意味を表している。また (23) は check…out というイディオムを基礎にした表現である。(24) と (25) はオランダの試合の見出しに使われた表現であるが、前者はウェールズやチェコの例と同様の語呂合わせをもとにした表現である。一方 (25) はオランダがコートジボアールに完勝した試合の見出しだが、この表現はオランダ代表の好調ぶりを表した表現である。この表現を理解するには、まずこれがオランダ代表のチームカラーであるオレンジ色と「活力のある、絶好調である」という意味を持つ juice という語をもとに作られた表現であることを知らなくてはならない。(26) は日本がオーストラリアに敗れた試合の表現であるが、これは試合が行われた Kaiserslautern という場所の名称を利用し、また前節で見た「戦争」や「生死」という概念をもとに slauter（虐殺する）という動詞を用いて、日本が豪州に大敗したことを比喩的に表現しているのだ。

また (27) のように、語の多義性を利用する表現も観察される。つまり、card という語が持つ「試合」と「(レッド・イエロー) カード」という二つの意味を利用し、オランダ対ポルトガルの試合が非常に白熱した（荒れた）試合であることとこの試合でレッドカードにより４選手が退場になったことを表すと同時に、警告が乱発され、退場者が続出した前代未聞の試合（選手よりも審判が中心になってしまった試合）に対した驚きと皮肉が伝えられている。この表現はサッカーに関する知識（ここでは警告と退場に関する知識）

がなければ、この表現の意図が適切に解釈されないであろう。つまり、与えられた言語表現をもとに、どの背景的知識にアクセスしなくてはいけないのかということが関わり、その背景知識にアクセスできない、もしくは知識がない受け手は、送り手の意図を完全に捉えることはできない。次の例を見てみよう。

(28) Out of le bleu. (*Daily Yomiuri*)

(28) の out of le bleu という表現は「突然」や「前ぶれなしに」などを表す out of the blue という慣用表現がもとになっている表現である。この表現を適切に解釈するには、フランス代表の愛称が "le bleu" であるという知識、2002 年のワールドカップから今大会の予選リーグまで続くフランス代表の最悪のチーム状況に関する知識、そして決勝トーナメントが始まってからチーム状況が急転したことなどに関する知識全てが必要となる。

また文学や映画の題名やせりふなどを基にした言語の間テクスト性という特徴を使用した表現も使用されることが多く、受け手は送り手の意図を完全に理解するには背景的な知識が要求される。

(29) TO-GO or NOT TO-GO. (*Daily Yomiuri*)

(30) Becks bends Ecuadorians. (*Japan Times*)

(29) の TO-GO or NOT TO-GO はシェイクスピアの *Hamlet* の有名な台詞を利用し、トーゴ (Togo) 代表の選手とトーゴサッカー協会間の金銭的な問題で試合に出場する（行く (to go)) かどうかが微妙な状況になっていることに関して皮肉をこめて報道している表現である。この表現を理解するには *Hamlet* の "To be or not to be. That is the question." という言葉が発せられた状況と、トーゴ代表がワールドカップという金銭的な目的のためでなく、国の威信をかけた深刻な戦いの舞台で金銭問題を理由に選手が試合をボイコットするか否かを苦悩しているという状況を比較しているといえるだろう。また (30) では映画 *Bend it like Beckham* からの語呂合わせとベッカムのフリーキックの特徴と、屈服させるという 3 つの意味が bend という動詞に込められていると考えられる。

このように、慣用表現や過去のテクストをもとにした新奇表現を使用する表現方法、つまり言語の「間テクスト性」という特徴を利用した表現方法が多用されているが、これは聞き手が表現を解釈する際に過去に使われたどのテクストに関する知識を参照するのかを指定しているということができる。つまり、聞き手はその「解釈の枠組み」を適切に把握し、背景知識にアクセスできなくては、書き手の意図を完全に解釈することはできず、テクストの意味を汲み取ることができなくなるのである。つまり、メッセージの送り手の意図を受け手が完全に理解するには、過去のテクストに関する知識やその他の背景知識が必要になるということになる。更にこの背景知識が特定の専門的な分野のものであると更に完全な解釈が困難になり、その結果、知識のない受け手を談話から排除することになる[2]。

またこのような創造的な比喩表現や、慣用表現をもとにした語呂合わせなどの表現方法には、単に試合結果という情報を伝達するのではなく、言語表現自体に対する高い意識がうかがえる。これは Jakobson (1960) が提唱している言語の 6 つの機能の一つである「詩的機能 (poetic function)」への注目、池上 (2006) のことばを借りれば「ことばそのものへの注目」ということができよう。つまり、この詩的機能に注目を当てるということは、言語の機能としてまず考えられる事実を伝達するという目的よりも、表現をより複雑にすることで、そこから何かしらの創造的な意味が生まれることが期待されているのだ。スポーツ報道では事実のみを単純に、そして正確に伝達するという目的以上に、事実を多少偏った視点からの報道になったとしても、どのような言語的手段で伝達するかということにより焦点が当てられている。スポーツ以外の社会的ニュースの報道において、このような詩的機能に重点を置いた表現が（比較的）避けられるのは、言語表現よりも、事実を可能な限り客観的、中立的、かつ正確に情報の受け手に伝達することが重要であるからだろう。

また、このような表現が使用されるもうひとつの要因として挙げられることは、受け手に過去のテクストに関する知識を参照することを伝達するという目的以外に、この種の表現が併せ持つユーモアにより、社会的ニュースと

比較してスポーツに関する話題がその他の社会問題よりも社会的に深刻でない、一種の娯楽であるということを指標する、いわばスポーツ報道という独自のコンテクストを創造するという目的があると考えられる。つまり、新聞報道におけるこのような表現方法が、いわば Gumperz(1980) が主張するコンテクスト化の合図 (contextualization cues) として機能しているということができる。一方で政治や経済などの社会欄においてこのような新奇表現が使われる傾向が低いのも、社会問題として適切なコンテクストを維持するためであるということもできるだろう。

3.3 原因と結果の結束性—点の論理と線の論理

前節までは出来事をどのように表現するのか、言い換えればどのような言語的な資源を使用して事態を伝達するのかということに焦点を当て新聞報道を分析してきたわけであるが、この節では新聞の見出しを取り上げ、出来事のどの部分に焦点を当て言語化するのかということを問題にし、日本語と英語の好まれる言い廻しを考察していく[3]。日本語と英語の表現は同じ試合の内容を伝達しなくてはならないため、どの要素に言及するのかということには共通点も非常に多いことは確かである。しかし、ここでは日本語と英語の表現方法の特徴的な違いに焦点を当て、Burke (1945) の言葉を借りれば、「人々がいま何をやっているのか、そしてまた彼らはなぜそれをやっているのかを語るに当たって、必ず言及されなくてはならない要素とはいかなるものなのか」ということに関して、日本語と英語それぞれの表現の特徴に差異があるか否かを分析していく[4]。

まず第一に日本語と英語で異なる特徴が観察される点として挙げられるのは、日本語の記事の見出しでは特定の選手名のみが表現される傾向が強い一方で、英語では個人名ではなく、チームとしての結果に重点が置かれていることが多い点である。

(31) ベッカム様サマ　手詰まり“降下抜群”FK 弾
(32) ベッカム精密 FK　開始 3 分　オウンゴール誘う
(33) クローゼ再び 2 発

(34) リケルメパスの起点 (『読売新聞』)

(35) Brazil survives Croatia crunch.

(36) England stutters into quarterfinal.

(37) Down to earth Germany easily beats altitude-loving Ecuador.

(*Daily Yomiuri*)

(38) Germany blows out Ecuador. (*Japan Times*)

このような表現は井上 (1995) が指摘する日本語では個人対個人、一対一の対立軸で野球という団体スポーツを捉える傾向と英語では集団一人ひとりの役割を重視した集団中心的な傾向と合致する[5]。英語では個人名が使用されている場合でも、日本語のように個人に関する記述だけでなく、その個人がチームや試合全体の結果にどのような影響を及ぼしているのかが具体的に明記されている。

(39) Robben powers Dutch to vital win.

(40) Pauleta goal gets Portugal past brave Angola.

(41) Zidane sets up emotional farewell as 33rd-minute penalty puts France in final.

(42) Big Phil, Ricard sends England home. (*Daily Yomiuri*)

(43) Zidane fires France into final.

(44) Totti puts Italy into quarters.

(45) Toni fires Italy into semis.

(46) Villa nets pair as Spain thrashes Ukraine. (*Japan Times*)

また日本語も英語も共に個人ではなくチーム名で記述されている際にも、日本語では一方のチームに関する記述のみがなされているが、英語では双方のチームが文中に現れる他動詞文による記述が行われ、双方のチームが互いにどのような影響を与え、また与えられたのかが明記されていることが多い。

(47) ブラボ！ブラボ！！華麗にメキシコ 3 点快勝

(48) チェコ多彩に 3 発

(49) イタリア前向き２発

(50) スイス２発快勝 (『読売新聞』)

(51) Bravo, Bravo Late strikes lift Mexico over Iran.

(52) Czechs cash in on Yanks.

(53) Italy puts Ghana to the sword.

(54) Switzerland puts an end to Togo's chaotic Cup. (*Daily Yomiuri*)

(55) Ghana stuns Czech Republic, earns Africa's first victory.

(56) Dutch team shows togetherness in win over Cote d'Ivoire.

(*Japan Times*)

これらの例からわかることは、英語では見出しで原因と結果が単文の他動詞文で表現されていたり、(41) や (46) のように接続詞で主節と従属節の関係が明記されているため、そこに論理関係が明確に表現されているという点である。一方で日本語では個人のプレーのみに注目が当てられたり、結果のみに焦点が当てられたりと、原因と結果が同時に表現されることが傾向として少ない。また原因と結果が表記されている場合でも、別々の異なる見出しで体言止めなどで表現され、一つ一つの見出しのつながりが明示されないという傾向がある[6]。

これは外山 (1973) の「線的論理」と「点的論理」に密接に関連しており、池上 (2006) はこの外山の点と線の論理という考え方をもとに、芭蕉の俳句とその英訳を比較し、英訳では俳句の各要素の論理関係を明示するために、日本語の原文にはない接続詞が表れることを指摘し、その理由を以下のように説明している。

(57) 旅に病んで　夢は枯れ野を　かけ廻る

(58) Ailing on my travels
Yet my dream wandering
Over withered moors

池上によると、(57) の芭蕉の俳句は「旅に病んで」と「夢は枯れ野をかけ廻る」の部分の関連は単に暗示されているだけである一方で、(58) の英語の訳

には Yet という接続詞が補われ、「いくつかのポイントが提示されるときには、それぞれのポイントの間をつなぐ論理関係を言葉で明示（池上、2006：241)」されているということができる。外山 (1973：14) は、「点的論理が了解されるところでは線的論理の窮屈さは野暮なものとして嫌われるようになる。なるべく省略の多い、言い換えると解釈の余地の大きい表現が含蓄のあるおもしろい言葉として喜ばれる」と述べ、俳句などの短詩型文学が日本文化で受け入れられるのはこのような論理が発達した文化だからであると述べている。

また、この日本語と英語の表現方法の特徴は、影山 (1995) の事態を把握する際の視点の取り方にも関連している。影山は出来事を上位概念（行為）と下位概念（結果）の二つに区分し、英語では上位概念から下位概念に向けたスル的視点を取る傾向が強い一方で、日本語では上位概念と下位概念の中間に、もしくは下位概念に視点を置くというナル的な視点を取るために、原因と結果を同時に記述することが不可能であると考えている。この視点の取り方から池上 (1981) の言うところの日本語のナル的言語と英語のスル的言語の特徴が現れるということであるが、この視点の取り方が原因と結果を別々に表現するという新聞報道の見出しにおける日本語と英語の特徴的な表現方法に非常に明確に現れていると言えるだろう[7]。

このように考えると、日本語では見出しの部分で原因と結果の関連性が明示されない、つまり因果関係の結束性が弱いため読者に因果関係に関する解釈の幅が残されているのに対し、英語では原因と結果の論理的結束性が強いため、受け手には解釈の幅が残されていないといえる。これは池上 (2000) が述べている日本語の〈無界性 (Unbounded)〉と英語の〈有界性 (Bounded)〉の特徴と並行するものと考えてよいだろう。この両言語の特徴の違いが明確に現れている例が同じ試合の見出しの (49) と (53) である。(53) の英語では、イタリアがガーナを破ったことが明記されている一方で、(49) の日本語では「イタリア前向き 2 発」とイタリアが 2 得点したことは書かれているが、イタリアが勝利したという試合結果が明記されていない。つまり、得点と試合結果のつながりが明確に言語化されないため、このテクストのみでは

イタリアの勝利がそのままで、その結果受け手にはある程度の解釈の幅が残されているのである。

また井上 (1995) が指摘している「落合効果」などの試合結果への「間接的な貢献」も日本語の原因と結果の結束性の弱さを反映していると言えるだろう。つまり何を勝利の要因として容認するかに日本語と英語の間で差異があるということができ、日本語の方が結果を導き出す原因となる要素の範囲が広いということになる。同様に日本のスポーツ報道では井上が1対1の対立軸で捉えることが好まれると指摘しているように、スポーツニュースではある特定の個人に焦点を当て、その人物が結果に（どれだけ好意的な見方をしても）直接関与していなくとも、結果との何かしらの結びつきを求める報道が非常に多く観察される。この点でも先ほどの日本語における原因と結果の無界性という特徴が現れているということもできるだろう。

このような日本語のテクストにおける原因と結果の結束性の弱さは、談話において言語化された結果が容易に打ち消されることへとつながるようである。以下の例を見てみよう。

(59) フロンターレは3点差とし、試合を決定付けます。しかし、その後FC東京の猛攻を受け、試合は振り出しに。（フジテレビ　『SPORT』11月10日）

(59) の談話はテレビニュースでの試合報道だが、一旦フロンターレが「試合を決定付けます」と言語表現上は完了した結果をアナウンサーが述べたにもかかわらず、その後この結果は打ち消され、試合結果はフロンターレが敗れるという結果になったのである。これは池上 (1981) や唐須 (1988) など様々な研究者により指摘されている日本語と英語の動詞の特徴に一致する。

動詞	行為に焦点	結果を含意
招待する/ invite	日本語・英語	—
説得する/ persuade	日本語	英語
手伝う/ help	日本語	英語
逃げる/ escape	日本語	英語
殺す/ kill	—	日本語・英語

表 1. 動詞のアスペクト（唐須、1988:160)

つまり、表 1 にあるように、日本語と英語の対応する動詞を結果が含意されているか否かという基準で比較すると、日本語と英語共に結果を含意する動詞と含意しない動詞もあるが、一貫して英語のほうが結果状態を含み、日本語は含まないために、同じ意味を表すと考えられている動詞でも、日本語と英語では結果が打ち消されるかどうかという点で差異が出てくるのだ。この点で各言語の語に組み込まれた意味と談話レベルでの特徴が一致しているということができるだろう。

ここまで見てきたように、英語では原因と結果を見出しの一文で明示する表現が好まれる一方で、日本語では俳句などの表現方法と同じように、原因と結果の論理関係は重要視されず、個人の行為もしくは結果のみに言及し、体言止めなどの受け手に解釈の幅を残す表現方法が好まれると言うことができるだろう。またこのような日本語と英語のテクストにおける表現方法の違いは唐須 (1988) が述べている日本と西洋の民話の構造の差異や言語構造の特徴と相同性をなしていると言うことができるだろう。唐須 (1988:161) は日本語の特徴が「すべてにあいまいで、聞き手に大幅な解釈の余地を残し、これに対して、英語はなるべく曖昧さを残さないような形で表現されており、聞き手はあまり勝手な解釈をする余地を与えられていない」と述べているが、同様のことが新聞報道における日本語と英語の特徴的な表現方法に関しても言うことができるだろう。

結論

本稿では日本語と英語の新聞というメディア報道における表現方法の傾向を見てきたが、両言語のスポーツ報道に特有の表現方法と各言語に特徴的な表現方法が観察された。まず日本語でも英語でも比喩的表現を使用することで、サッカーというスポーツをその他のドメインの知識を参照し捉えているということである。また両言語でも慣用表現をもとにした語呂合わせなどの表現が駆使されており、言語の「詩的機能」を重視する傾向が見て取れる。この「詩的機能」への傾向は、創造的な意味を作り出すことと、スポーツ欄というコンテクストを創造するという動機づけが考えられる。また社会問題に関する報道では、スポーツ報道と比較すると「詩的機能」が重要視されないのは、情報を可能な限り客観的に、そして正確に読み手に伝えること、つまり表現方法よりも情報伝達というより実用的な機能を重視することがより重要であるからと言えるだろう。また、原因と結果を表現する方法も外山の提唱する日本語の点の論理と英語の線の論理が反映されているということができ、池上 (2000) が言う日本語の無界性と英語の有界性という特徴と関連していると考えられる。

Burke (1989) が述べているように人間の行動には、状況に働きかける積極面と状況を理解するという認識面がある。これを新聞報道というコンテクストに置き換えると、前者が報道側、後者が記事の読み手である。つまり、この Burke の分類の前者に当たる新聞記者の視点に立てば、事態をどのように表現するのか、どのような比喩表現やことわざや慣用表現などの過去に使用されたテクストを使用するかによって、コンテクストを生み出し、読者に解釈の枠組みを提示し、どのような背景知識を参照してほしいのかを示しているのである。一方、読者がある記事を書き手の意図通りに解釈するためには、言語表現を通して書き手が送っている合図をつかみ、適切な解釈の枠組みに則って、テクストを読むことが求められているのである。つまり、Rommetveit や Ingarden などの現象学者たちが述べている通り、テクストの意味は受け手の積極的な介入なしでは、意味の伝達は完了 (finalize) することはないのだ[8]。

注

1 比喩表現とドメインに関してはCroft (1993)、Kövecses (2002、2005) などを参照。

2 最近の動向として、サッカー共通語であるSoccerantという言語（社会変種）が作られ、この変種に関する本が出版されている。この言語はもともとサッカーを語る際の世界共通語として構想されたものであるが、使用されている表現は全てこれまでのサッカーの歴史や慣例が土台にあるため、いわゆる言語による参与者のコミュニティーからの排除が行われる可能性が高まるといえるだろう。例えば "Was the goal a Maradona?" や "Should the ball be passed to the porteur d'ear or the trequarista?" などが挙げられる。

3 見出しを分析の対象にしたのは、その出来事を報道する際に最も重要な要素が含まれているためである。また読者によっては見出しにしか目を通さない場合もあるため、そこには書き手が最も伝達したい要素が言及さていると考えられる。

4 引用の訳は森常治（『動機の文法』晶文社、1982) による。

5 この点は井上 (1995) などで指摘されているように、従来の日本社会の集団主義と欧米社会の個人主義と対立するように思えるが、日本社会の集団主義はバイアスのかかった概念であることは注意しなくてはならない。

6 多々良 (2005、2006) ではスポーツニュース報道で多用される「体言止め」などの表現を分析し、日本語独自のレトリックとの関係を述べている。ニュース報道では時間やスペースの問題で、文法的機能やコピュラなどが省略される傾向にあるが、ニュース報道などで使用される体言止めには、様々な機能があり、受け手に共感を求めるストラテジーとして使用されることがある。

7 これは他動性の問題にも関連する問題であり、Hopper & Thompson (1980) の他動性に関する議論を参照することで日本語と英語において同じ出来事を報道する際にどのような言語表現上の違いがあるのかということが分析される。Hopper & Thompson (1980) は他動性という概念を、参与者、意志性、瞬時性、結果などのパラメターを含むか否かという観点から分析し、物語の根幹を成す重要な前景化された箇所でより他動性が高い表現が使用されると述べている。ことわざなどの同じ状況を記述した日本語と英語の表現を比較した場合では、状況のみに焦点を当て記述する傾向が好まれる日本語よりも、人間に焦点を当て、参与者がある行為を行うことを記述する傾向が強い英語の方が、この他動性の割合が高いと言われている (Hiraga, 2005)。つまり、英語のほうがより人間の行動とその結果当然導き出される事態に焦点を当てる傾向があるということができる。これと同様のことが新聞報道でも当てはまるようだ。つまり英語では重要な見出しにおいて他動性の高い表現が好まれる一方、日本語では個人や一方のチームのみに焦点を当てた表現やモダリティーが表現されない名詞句表現などの他動性の低い表現が好まれるということができる。

8 Hanks (1996)、Tatara (2002) も参照。

参考文献

Burke, Kenneth. (1945). *A Grammar of Motives*. New York: Prentice Hall.

———. (1989). *On Symbols and Society*. California: The University of California Press.

Croft, William. (1993). "The Role of Domains in the Interpretation of Metaphors and Metonymies." *Cognitive Linguistics*. 4. pp. 335–370.

Ferguson, Charles A. (1983). "Sports Announcer Talk: Syntactic Aspects of Register Variation," *Language in Society* 12. pp.153–72. Foley, William A. (1997). *Anthropological Linguistics: An Introduction*. MA, Oxford: Blackwell Publishers.

Gumperz, John. (1980). *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hanks, William F. (1996). *Language and Communicative Practice*. Boulder, Oxford: Westview Press.

Haviland, J. B. (1979). "Guugu Ymidhirr brother-in-law language" *Language in Society* 8. pp.365–93.

Hiraga, Masako. (2005). "Transitivity in Proverbs: A Contrastive Study of Japanese and English Texts", 9th International Cognitive Linguistics Conference Book. p. 405.

Hopper, Paul. (1998). "Emergent Grammer", *The New Psychology of Language*. pp. 155–76. Mahwah, N.J. : L. Erlbaum Associates.

池上嘉彦. (1981). 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.

———. (1993). 「学術文庫版のための訳者解説追補」In B. L. ウォーフ(池上嘉彦訳)『言語・思考・現実』pp. 321–338. 講談社学術文庫.

———. (2000). 『「日本語論」への招待』講談社.

———. (2006). 『英語の感覚・日本語の感覚　＜ことばの意味＞のしくみ』NHK ブックス.

Ingarden, R. (1973). *The Cognition of the Literary Work of Art*. Translated by R. A. Crowley and K. R. Olson. Evanston, IL: Northwestern University

Press.

井上逸兵. (1995). 「日米の野球報道にみる言語と文化の型」『記号の力学』pp.129–41. 日本記号学会.

岩崎勝一. (2006). 「多重文法仮説：英語受動文の考察」『Conference Handbook24』pp. 149–154. 日本英語学会.

Jacobson, Roman. (1960). Closing Statement: Linguistics and Poetics. *Style in Language*. pp. 398–429. Cambridge, MA: MIT Press.

影山太郎. (1996). 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお.

Kövecses, Zoltn. (2002). *Metaphor: A Practical Introduction*. New York: Oxford University Press.

_____. (2005). *Metaphor in Culture*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.

Lakoff G. and M. Johnson. (1980). *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.

松井真人. (1998). 「スポーツとレトリック—日本野球におけるメタファー」『芸文研究』pp. 107-119. 慶應義塾大学.

籾山洋介. (2006). 『日本語は人間をどう見ているか』研究社.

Rommetveit, Ragner. 1974. *On Message Structure: A Framework for the Study of Language and Communication*. New York: Wiley.

Tatara, Naohiro. (2002). "Phenomenological Approach to Language Expressions: Habitus and Rhetorical Styles in Languages" *Colloquia* 23. pp.11–21. Keio University.

多々良直弘. (2005). 「スポーツニュースのレトリック」『社会言語科学会第16回大会予稿集』pp.86–89. 社会言語科学会.

_____. (2006). 「ニュース報道における言語使用～名詞句表現の談話機能」『桜美林レヴュー』pp. 123–36. 桜美林大学.

_____・八木橋宏勇. (2006). 『認知と言語の接点——言語相対論を考える（「言語と人間」2006年6月例会発表資料）』

唐須教光. (1988). 『文化の言語学』剄草書房.

外山滋比古．(1973).『日本語の論理』中央公論社.